

研究論文(査読なし)

# 崔貞熙の植民地末期における時局関連作品 A Study on Choe Jeong-Hui's Novels in Collaboration with the Japanese War Regime in the Late Colonial Period

## 三つの類型と「野菊抄」 Three types and “Yagukcho”

山田 佳子<sup>1</sup>  
YAMADA Yoshiko

### 1 はじめに

崔貞熙は 1931 年に三千里社に入社し、記者として活動しながら小説を書き始め、1937 年に「凶家」(『朝光』1937.4)で登壇した。初期の代表作とされるのは 1939 年から 1941 年にかけて書いた「地脈」(『文章』1939.9)、「人脈」(『文章』1940.4)、「天脈」(『三千里』1941.1,3,4)である。いずれの作品も当時の道德観では認められない男女の結びつきと別れ、子供の養育問題などを女性の視点から描いており、フェミニズムの観点から論じられることが多い。

一方、植民地末期にあたるこの時期には日本の戦争に協力的な活動を積極的に行っていたことも明らかになっている。1939 年からは日本語による執筆も行うようになるとともに、日本語、朝鮮語を問わず、相当数の時局関連の文章を書いている。

本稿では小説を中心に植民地末期における崔貞熙の時局関連の文章を取り上げ、執筆に至る経緯とともにその内容の推移を明らかにする。とくに私小説とも読むことができる「野菊抄」については、日本語で書かれていることと関連づけて詳細な検討を試みたいと思う。

### 2 植民地末期における執筆数および内容の推移

崔貞熙が 1939 年から 1942 年にかけて発表した文章について、時局性の有無にかかわらず現在までに筆者が把握しているものを言語別(朝鮮語/日本語)に数を整理すると次のようになる。戦時期における崔貞熙の執筆活動は 1945 年まで続いていたことが確認されているが内容について検討を要する部分があり<sup>2</sup>、また 1942 年 11 月の「野菊抄」を最後にいったん活動が途絶えているため本稿では 1942 年までを研究対象とした。ここでは崔貞熙の執筆活動が時局の推移に呼応していく様子を概観する。

崔貞熙は 1939 年から日本語の文章を発表しはじめているが<sup>3</sup>、日本語で書かれているからといって必ずしも時局と関連する内容とは限らず、逆に朝鮮語においても多くの時局関連の文章を書いている。ただし、厳密には何を基準に時局的とみなすかという点で明確な区別が困難であるため数値化はせず、内容の紹介にとどめる。なお、小説以外の文章は一括りにし、座談会における崔貞熙の発言も含めた。

崔貞熙の植民地末期における時局関連作品

	記事・随筆・座談 (朝鮮語／日本語)	小説 (朝鮮語／日本語)	日本語への 翻訳
1939年	8／2	2／0	
1940年	23／4	3／0	1
1941年	7／10	2／1	1
1942年	8／8	2／2	

これを見ると、1940年の執筆数が多くなっているが、これは座談会記事が七件含まれていることによる。日本語による執筆は創刊されて間もない『国民新報』に掲載された随筆、「母のころ ― 子供をもつて見れば ―」(1939.5.14)が最初である。これは著者が日曜日に昌慶苑や朝鮮神宮に行くというくだりがあるものの、そうした背景を除いてはとくに時局を感じさせる内容ではない。1939年10月に文学者の御用団体である朝鮮文人協会が発足して以後の1940年は日本語の文章が四件確認され、1941年に大きく増加している。朝鮮総督府の機関紙『京城日報』への執筆が多い。ただし先にも述べたように内容は日常生活の雑感、映画についてなど、時局とは無関係なものも含まれている。崔貞熙が記者を務める『三千里』も1940年7月号より日本語頁が設けられた。発表媒体別の内訳を以下に示す。

発表媒体別内訳(K=朝鮮語、N=日本語)

1939年	記事等	K	文章3、三千里2(うち座談2)、女性1、作品1、東亜日報1
		N	国民新報2
	小説	K	文章2
1940年	記事等	K	三千里10(うち座談4)、毎日新報3、文章2(うち座談1)、女性3(うち座談1)、人文評論2、家庭之友2、書き下ろし1
		N	国民新報1、モダン日本1、緑旗1(座談)、京城日報1
	小説	K	文章2、家庭之友1
1941年	記事等	K	毎日新報5、三千里1、文章1(座談)
		N	京城日報8、三千里2
	小説	K	三千里1、春秋1
		N	国民総力1
1942年	記事等	K	大東亜3、毎日新報3、春秋1、半島の光1
		N	国民文学3、京城日報2、大東亜1、文化朝鮮1、緑旗1(座談)
	小説	K	大東亜1、野談1
		N	国民文学1、新時代1

1940年からは朝鮮語による総督府機関紙『毎日新報』にも執筆し、時局関連とみなされる文章が増えていく。『毎日新報』に掲載されたものは、「女性指導部隊」などの主題の下に女性の啓蒙を目的とした文章が多い。

これは「愛国班」の結成に関連するものと思われる。そして太平洋戦争が始まるとさらに内容に戦時色が強まる。1942年には朝鮮における徴兵制実施の閣議決定を受け、少年とその母を題材とした文章が繰り返し執筆される。

小説に注目すると、1940年から1942年まで全体数はほぼ同じであるが、1942年の四編は言語を問わず全て時局関連の内容である。個々の作品については次章以降で述べていく。

### 3 崔貞熙の時局関連小説

前章で見たように崔貞熙は1939年から1942年にかけて十二編の小説を発表している。このうち時局的であるとみなされるのは五編である。それらは内容から大きく三通りに分けることができる。一つ目は「幻の兵士」(『国民総力』1941.2)に見られるような「内鮮一体」を標榜した作品であり、二つ目は「二月十五日の夜」(『新時代』1942.4)と「薔薇の家」(『大東亜』1942.7)のような、「愛国班」の活動を賛美した作品である。そして三つ目が「黎明」(『野談』1942.5)と「野菊抄」(『国民文学』1942.11)のような、兵士に憧れる少年とその母親が登場する作品である。なお、「幻の兵士」と「二月十五日の夜」、「野菊抄」は日本語、「薔薇の家」と「黎明」は朝鮮語で書かれている。

本稿ではこの三つ目の類型に属する「野菊抄」について詳しく見ていくが、ここでは先ず、一つ目と二つ目に属する作品について述べておく。

#### 3-1 「内鮮一体」の標榜

先に述べたように崔貞熙の最初の日本語創作である随筆、「母のころ — 子供をもつて見れば —」はとくに時局との関連が見られない。その次に、やはり『国民新報』に掲載された「ではご無事で」(1939.12.3)は、日本人兵士に向けて書かれた朝鮮文人協会の慰問文集の中に含まれている。協会の名で冒頭に掲げられた文章が「八紘一字」の精神を威勢よく謳っているの対し、「ではご無事で」の筆致は「恐らく、あなたはいゝ兵隊さんで、そしていゝ人間でいらつしやる事と思はれます<sup>4</sup>」といったように曖昧模糊としており、慰問文とはいえ戦意を高揚させるような内容ではない。

「幻の兵士」は朝鮮に駐留している日本人兵士と朝鮮人女性の交流を描いた日本語小説である。「ではご無事で」が匿名の日本人兵士に向けられた文章であるのに対し、「幻の兵士」では日本人兵士五人との具体的な交流の場面を描いている。五人の兵士の前歴や趣味などについても触れられ、それぞれが個性を持った一人の人間として描かれており、それが著者の何らかの体験に基づくものなのか、まったくの創作なのか、興味を引く。とくに、兵士に求められて女性がアリアンの歌をそと歌ったり、女性からハングルを教わった兵士に「此の字は、生きてみますよ<sup>5</sup>」と言わせたりする場面は、温かな情緒すら感じさせる。ただし作品の後半になると、「新東亜建設」、「日本精神」、「支那と朝鮮と日本とは神代からの宿命的なつながり……<sup>6</sup>」といった表現を用いて時局に呼応した作品としての体裁を整えている。

「幻の兵士」に先立って書かれたものに「内鮮問答・親愛なる内地の作家へ」(『モダン日本・朝鮮版』1940.8)がある。そこで崔貞熙は日本の作家たちに対し、「知らないところでどうして理解が生じませう」、「今まで貴方方が持つていらした、態度を捨てていただきたいのです<sup>7</sup>」という言葉を送り、朝鮮文化への理解を求めている。ここには日本と朝鮮を同等の存在ととらえる崔貞熙の「内鮮一体」に対する考え方が読み取れる。

「内鮮一体」というスローガンは朝鮮総督府が朝鮮人を「皇民化」するための方便であり、表向きには朝鮮人にも日本人と同等の機会が与えられるような看板を掲げておき、内実は朝鮮文化を否定し、朝鮮人差別を助長するものであった。しかし「内鮮一体」が提唱された日中戦争初期の時点においては、「天皇と日章旗を敬愛しながらも朝鮮の文化と言葉を保つことができる」と解釈することが主流であったとされる<sup>8</sup>。すなわち崔貞

熙はいずれも日本語で書かれたこれらの作品において、文字どおりの「内鮮一体」を掲げ、人間と人間の対等な触れ合いを通じて朝鮮の存在を主張しようとしたものと思われる。

### 3-2 「愛国班」の賛美

崔貞熙は1940年から『毎日新報』にも執筆するようになった。「新生活の樹立と舊習打破[3]新式家庭にも迷信が残っている。そして子供をもう少し尊重しよう!」(1940.8.8)では、家長だけを大事にして子供をなおざりにする慣習は改めるべきであると説き、「女性指導部隊 — 顔の化粧よりも心の修養が必要」(1940.8.13)では、身なりを装うことも大切だとしたうえで、読書を奨励している。また「女性訓 — 美しく」(1941.4.20)はごく短い文章であるが、心も行動も表現も美しくありたい、と綴っている。この時期の文章にはほかにも「女流随筆 — 赤いスカートをはいた日」(『家庭之友』1940.12)のように女性の装いや「美」を素材にしたものが散見され、時局に関連するとはいっても勤勉や節約の奨励といった、女性を対象とした一般的な啓蒙の文章が多い。

日本語による随筆「二つのお話」(『京城日報』1941.1.5)は比較的まとまった文章である。ここでもやはり「女のお洒落は虚栄から来るもののみ考へては間違いです」、「お洒落をするのは精神の弛みを現はさない一つの方法であり、手段であるやうです<sup>9)</sup>と、「美」を強調している。続けて、自分は情熱は人一倍持っているが、人前に出るのが苦手なため「何々の婦人会」や「町会の班長」を断ったということが書かれている<sup>10)</sup>。これはおそらく「愛国班」のことであると思われる。

愛国班は国民精神総動員朝鮮連盟の下部組織として結成され、十戸を一つの班として民衆の統制と動員の役割を担っていた<sup>11)</sup>。1940年末から結成が強化され、班長には女性が多く任命された<sup>12)</sup>。毎月一回定められた常会日には神社参拝、国旗掲揚、「皇国臣民ノ誓詞」の斉唱、勤労奉仕など、皇民化政策を浸透させる活動を行っていたが、人々の関心は薄く、太平洋戦争開戦直後の1942年1月からは各家庭一人の参加が義務付けられるようになる<sup>13)</sup>。

崔貞熙の文章に時局色が強まるのは1941年8月25日に三千里社が府民館で各界の著名人を集めて「臨戦対策協議会」を主催してからである。「臨戦対策協議会」は「臨戦対策協力会」と改名すると同時に、銃後の活動を積極的に展開していく。同年9月7日には「債券街頭遊撃隊」として、総勢七十六名が市内の各所に繰り出して債券を販売したが、崔貞熙もこれに加わり<sup>14)</sup>、さっそく日本語による随筆「初秋の手紙(第一信)債券を売る日」(『京城日報』1941.9.23)にそのときのことを書いている。また三千里社社長の金東煥は同時期、労働賤視の打破を掲げた「国民皆労運動」にも参与している<sup>15)</sup>。そうしたことが同社社員であり、金東煥と内縁関係にあった崔貞熙の時局協力への姿勢に直接結びついていったと見られる。「初秋の手紙」では、自分の考えは以前と変わらないが、以前は「情熱が足らなかった」ために積極的な行動ができなかったのだと弁明し、「足場」がはっきりしていなくては何事もできない<sup>16)</sup>、と意味深長な表現によって自らの行動を正当化しているのである。「二つのお話」を書いた当時からの変化を読み取ることができる。

日本語小説「二月十五日の夜」は愛国班を主題とした作品である。太平洋戦争開戦後に書かれたこの作品では、「美」が「敵機をおつかけて戦っている飛行機<sup>17)</sup>」にたとえられ、愛国班長になったことを夫に咎められた主人公が愛国班の実態と、班長としての自分の役割の重要性を述べて夫を説得する。そのくだりは人々が愛国班を軽視して参加しようとせず、当局が指導の強化を始めた当時の状況がそのまま主人公の言葉に置き換えられている。なお、同じ時期に崔載瑞は愛国班を扱った作品について、「国民文学の最も重要な一項目として追究されるべきものである<sup>18)</sup>」と語っている。

「二つのお話」、「初秋の手紙」、「二月十五日の夜」を並べてみると、時局の推移にしたがって崔貞熙の表現方法が微妙に変わっていく様子がよくわかる。『毎日新報』に見られた朝鮮語による女性啓蒙の文章とは異

なり、日本語で書かれたこれらの作品には作家としての崔貞熙の立場と、時局の推移に対応していく姿勢が明確に見てとれる。その後、「二月十五日の夜」の内容を膨らませて「薔薇の家」が書かれた。

「薔薇の家」は朝鮮語による放送小説である。ここには愛国班活動の奨励に加えて、崔貞熙が『毎日新報』に書いてきたような節約生活の賛美といった女性啓蒙の内容も盛り込まれている。戦局の悪化により物資の不足がより深刻化してきた状況に呼応したものであろう。放送小説という形式にふさわしく、広く朝鮮女性に訴えかけることを目的として書かれたとみられる。

## 4 「野菊抄」における「少年」と「母」

### 4-1 「少年」と「母」の登場

太平洋戦争の開戦は朝鮮に徴兵制の導入をもたらした。1942年5月に、朝鮮における徴兵制の実施が閣議決定される。崔貞熙の文章にも「愛国班」に代わる新たな素材が見られるようになる。

朝鮮語小説「黎明」には学生時代の同級生である三人の女性とそれぞれの息子たちが登場する。彼らは1941年の大晦日に数年ぶりに顔を合わせる。いずれも国民学校に通う子供たちは宿題の「慰問文」を一緒に書き、「日米英戦」と称して真剣な様子で戦争ごっこをして遊ぶ。彼らの会話は所々に日本語が用いられ、「天皇陛下万歳<sup>19</sup>」（原文は日本語読みをハングルで表記）と叫びもする。それに対して母親たちは時局への対応の仕方にそれぞれ温度差がある。三人のうちの一人はもともと控えめな性質だったにもかかわらず、府民館で「国に息子を捧げよう<sup>20</sup>」と演説するほどに変貌したが、別の一人は西洋人の家で育てられたために彼らへの恩を捨てることができず、西洋人に道案内をして息子に叱られる。しかし彼女は友人から「子供たちが正義だと考えている道のために、子供たちと同じように自分をまっさらにし……彼らと歩調を合わせて進む<sup>21</sup>」ことが互いの幸福につながるのだと説得される。そして三組の親子は「銃後少国民訓カルタ<sup>22</sup>」に興じて1941年の大晦日を過ごす。

崔貞熙のこの時期の文章にはいわゆる「軍国少年」が登場する。崔貞熙の文章に最初に軍国少年が確認されるのは「対米開戦と婦人の決意」（『毎日新報』1941.12.12）である。ここに登場するのは「大和魂<sup>23</sup>」（原文はハングル表記）を叫ぶ国民学校三年の少年であり、崔貞熙自身の息子である。崔貞熙の息子がじっさいに軍国少年であったのかどうかはわからないが、「帰還勇士と文人座談会」（『緑旗』1942.1）においてもやはり息子のことを語っている。このときは「大和魂」のみならず、あるエピソードを紹介している。それは「死」への覚悟である。息子から「お母さん僕も戦争に行きたいけれど、行つてもいいですか」と問われた崔貞熙は、「え、いいですよ」と答えたあと、「戦争に行つて死んだらどうしますか」と問い返す。すると息子は「日本のためにつくして死ぬんだから、よるこんで死にます」と答えたという<sup>24</sup>。

1938年2月に陸軍特別志願兵令が公布されて以後、朝鮮では少年の意識を「皇民化」するための様々な方策がとられた<sup>25</sup>。そもそも志願兵制度の目的について志願兵訓練所所長の海田要は、あくまで「皇国臣民育成の精神教育」にあり、「戦闘を基準とする」軍隊とは「大いに異なる」と述べていた<sup>26</sup>。しかし早くも一期生から戦死者が出てしまったことに対しては「朝鮮全道に非常に大きなショックを興へ、之こそ朝鮮の名譽だと言ふ聲が澎湃として起つて<sup>27</sup>」きたと言いつづけている。すなわち一志願兵の死を「名誉」と言い換えることにより、制度に対する人々の拒否感を和らげようとしたのである。その最初の犠牲者である李仁錫上等兵の死<sup>28</sup>は「半島の新しき英雄として」、「紙芝居に、小説に、映画に、到る處に餘りにも廣く知れ亘つて<sup>29</sup>」いった。また、教科書を通して教えられた<sup>30</sup>。子供たちは美辞麗句が散りばめられたそれらの媒体を通して、志願兵に対する憧れを膨らませたはずである。

子供たち以上に感化の対象として重要視されたのは母親たちである。「志願兵（志望者）十萬突破 記念特輯」（『三千里』1940.7）の中の「志願兵母妹に送る書」には、息子を志願兵として送り出すべく母たちを鼓舞する文章が多数掲載されている。とくに李仁錫上等兵の死を意識して書かれたという印象が強い。先の海田所長は次のように述べている。

昔から偉人傑士と言はれる人の多くがその母の偉大なる感化より生れ出て居ることは歴史の證明するところでありまして、母の感化程偉大なものはないのであります……

日本の母親がその慈愛の懷に我児を抱きつゝ「大きくなつたら立派な人になつて天子様に忠義を盡すのですよ」と言ひきかせたことが、日本の子供達をどんなに強い國民として育て上げたことでせうか……<sup>31</sup>

先に挙げた「帰還勇士と文人座談会」には、子供たちの変化に大人がついて行くような格好になっているという発言が見られるが<sup>32</sup>、そのように子供に比べて母の感化が難しい様子は崔貞熙の「黎明」にもよく映し出されている。

#### 4-2 「野菊抄」の母子像

朝鮮における徴兵制の実施決定を前後し、崔貞熙の文章には「帰還勇士と文人座談会」に見られるような、「死」をめぐる崔貞熙母子のエピソードが繰り返し挿入される。次のようなものである。

これからの私は子供に「僕、戦争に征つて死んでもお母さん泣きませんか」と聞かれる時、まごつかずに答へることと思ひます。

「お母さん、お金がなくても、お父さんがなくても、僕兵隊さんになりますか」と聞かれるとしても、私はもう暗い顔をせず、ほがらかに自信と勇気を持つて對してゆけると思ひます<sup>33</sup>。

このことはすなわち崔貞熙自身が笑顔で息子を戦場に送り出す「軍国の母」に変貌したことを意味する。同様の内容は「時局の母親——軍国の子供に感激」（『京城日報』1941.2.18）、「君国の母<sup>34</sup>」（『大東亜』1942.5）などに見ることができる<sup>35</sup>。

崔貞熙は記事や随筆に書いたことを土台に小説を執筆する傾向がある<sup>36</sup>。そのような意味ではこのエピソードが用いられた日本語小説「野菊抄」は「黎明」よりも注目すべき作品であると言える。朝鮮語小説「黎明」にはこのエピソードが挿入されていない。また、「野菊抄」には崔貞熙が実際に志願兵訓練所を訪れたときの見聞も盛り込まれている。崔貞熙は1940年10月に「朝鮮文士部隊」として京畿道楊州の志願兵訓練所を訪れ、短い報告記事を書いているが<sup>37</sup>、「野菊抄」には訓練所の生活の様子がより具体的に記されている。海田所長が小説では原田という名で登場し、前項で見たような言葉で少年の母親を感化する様子が再現されている。そしてさらに、この作品に関してはあとで述べるように、とくに書かれた時期に注目する必要がある。「野菊抄」は崔貞熙には珍しく一人称で書かれており、物語は自分と息子を捨てた「あなた」にその後の生活を報告するような形で展開する。

ある日「わたし」は志願兵に憧れる十一歳の息子連れて志願兵訓練所を見学に行く。訓練所の生活は規則に縛られ食事も乏しいが、「わたし」は所長の言葉に感化されてそれら全てを肯定的にとらえ、息子を戦場に送り出す覚悟を固める。そして息子と自分の逞しい姿を「あなた」に誇示することで「あなた」を見返し、同時に、妻子ある「あなた」と関係を持ってしまった自分の過去の誤ちの代償として、野菊を息子とみなして育てながら母として強く生きることを決心する。「わたし」の変化は「ずっと前、おかあさんわかつたのね。も

う泣きませんから、勝ちやんはうんと立派な兵隊さんになつてみ国のためにつくすんですよ<sup>38</sup>」と表現されており、「わたし」は「軍国の母」に変貌したと見ることができる。

「野菊抄」が書かれた当時、崔貞熙の息子は「わたし」の息子と同じ十一歳であった。このとき崔貞熙は三千里社の社長である金東煥と内縁関係にあったが、その息子は前の夫との間にもうけた子であり、それまで二人の間を行き来していた。しかし「野菊抄」が書かれたまさにその頃、金東煥との間に新たな命が誕生しようとしていた。そのことは息子との別離を意味するであろう。いずれにせよ息子との別れは当初より覚悟せねばならないものであった。妻子ある男性との関係や子供をめぐる葛藤は崔貞熙の小説に繰り返し扱われてきたテーマである。その一つである「静寂記」（『三千里文学』1938.1）をこの時期、日本語に翻訳して新たに発表している（『文化朝鮮』1941.5）ことから、崔貞熙が「野菊抄」を書いたときの心境を推しはかることができる。すなわち崔貞熙は日本軍の兵士という、自らの手の届かない場所に息子を送り出さざるを得ない母親の究極の行動を肯定的に描くことにより、自らの生き方に答えを見出そうとしたのではないだろうか。

植民地末期のこの時期に書かれた作品の大部分は、題材や舞台に「時局的」なものを採用し、そこに自己が訴えようとするものを繰り返込むという方法<sup>39</sup>がとられたとされる。それに従えば「野菊抄」はその典型であると言うことができる。戦争協力の作品でありながらも崔貞熙ならではの作品として完成度の高さが感じられるのはそのためであろう。

しかし敢えて考えてみたいのは、たとえ枠組みに過ぎないとしても小説家である前に一人の母親として、なぜわが子の死を素材にして小説を書くことができたのかということである。それについて「野菊抄」が日本語で書かれたということと関連させて考えてみたいと思う。

## 5 「野菊抄」の成立過程

李光洙は日本語小説「兵になれる<sup>40</sup>」において兵士に憧れる少年とその父の話を描いている。十四年前、主人公の息子である六歳の少年は朝鮮人は兵士になれないことで思い悩み、父も息子の願いが叶わないことを無念に思っていた。そして今、ついに朝鮮に徴兵制が敷かれることになったのだが、すでに息子はこの世にいないというストーリーである。李光洙の長男もこの少年と同じ病で亡くなっており、このとき生きていれば遠からず徴兵の可能性のある年齢になっていたはずである<sup>41</sup>。しかしこの作品を書いたときに息子は存在していない。李光洙の意図がどこにあったのかはわからないが、少なくとも「野菊抄」を書いたときの崔貞熙はそれとは全く異なる状況にあった。

「野菊抄」の十一歳の少年もまだ徴兵される年齢ではないし、小説が書かれた当時の日本軍はすでに壊滅状態にあったが、まだ敗戦を認める段階にはなく、ましてメディアは報道を封じられていた。したがって崔貞熙としても十一歳の息子の徴兵をまったくあり得ないことは考えなかったはずである。じっさい当時の崔貞熙は日本軍の敗戦を予想してはいなかったと思われる<sup>42</sup>。

徴兵制の実施決定に伴って顕著になるのは「国」、すなわち「天皇」のために命を捧げる精神の抽入である<sup>43</sup>。総督府は子供たちに対しては「修身」の授業を通して早くから「死への教育<sup>44</sup>」を行っており、1941年4月の「国民学校令」の実施にあたって「死すべき時にいさぎよく死して永遠に生きる生き方を知らしめ<sup>45</sup>」ることを指導上、特に留意する点として挙げていた。就学率の低さ<sup>46</sup>を考慮すれば、全体的な効果には疑問があるものの、無垢な子供たちは教えられたまを訳もわからず家で暗唱したかもしれない。

一方、崔貞熙の「君国の母」が掲載されている特集記事「半島指導層婦人の決戦報告の大獅子吼!!!」（『大東亜』1942.5）には女性知識人たちによる力強い時局協力のメッセージが並ぶ。それらはもともと演説として語られたものである。節約や貯蓄の奨励、生活の改善といった内容は珍しいものでは

ないが、「国のために命に限っては惜しんではなりません。息子の命も夫の命も全て捧げ、女性も出ると言われれば命を爆弾に変えて戦場に投げ出すのです<sup>47</sup>」という毛允淑のメッセージは狂気すら感じさせる<sup>48</sup>。しかしその狂気ゆえに、毛允淑がわが身に起こり得ることとして発した言葉とは考えにくいのも事実である。

言うまでもないことであるが、天皇のために命を捧げることを当時の日本兵すら名誉とは考えてはおらず<sup>49</sup>、また、息子を戦死させた母親はどんな称賛にも心を癒やされることはなかったとされる<sup>50</sup>。そしてこれも当然のことながら朝鮮の母親ならばなおさら息子を兵にとられることを強く拒んだ<sup>51</sup>。まして日本の天皇のために命を捧げることなど思いも及ばなかったであろう。そのことは次の文章からも読み取ることができる。

内地の婦人が出征する息子や夫に「天皇のために一死奉公してください。家のことは何も心配要りません……」と言ったその一言が進撃中の将兵には何物にも代えがたい慰安の言葉なのです<sup>52</sup>。

逆説的ではあるが、「内地の婦人」の行動として紹介すること自体、「天皇のための一死奉公」という考え方がこの作者をはじめとして、朝鮮の女性には浸透していない、そして理解されていないことの証左である。

こうしたことを根拠に「野菊抄」の成立過程を考えてみる。「野菊抄」は当時の崔貞熙にとっての最大の関心事、すなわち息子との別離に時局の枠をはめることで成り立っている。その枠の部分にあたる、息子を戦場に送り出す「軍国の母」としての主人公の行動については、先に見たとおり、崔貞熙にとって避けることのできない問題に決着をつけるための究極の手段として解釈することができる。さらに死をめぐる息子のエピソードが挿入された崔貞熙の他の文章や、当時の教育、またメディアとの関連から探っていくと、「野菊抄」が日本語で書かれたことの意味が見えてくる。

「軍国少年」である主人公の息子はおそらく学校で「死への教育」を「日本語」で受けたと思われる<sup>53</sup>。しかし母はそうではない。メディアでは日本の天皇に命を捧げるといふ日本的な「一死奉公」の精神が喧伝され、母たちは最も感化されるべき対象とされた。しかし「皇民化教育」を受けていない母は日本語を解さないばかりか、特殊性を帯びた日本的な精神など想像すら及ばないであろう。

崔貞熙は軍国少年の息子との「死」をめぐるエピソードについて、講演録を除いては全て日本語で書いている。そして「死」の色彩がない「黎明」は朝鮮語で書いているが、「天皇陛下万歳」や「兵隊さん」、「慰問袋」などはハングル表記の日本語である。そのように単語レベルで日本語を使うことは珍しいことではないが、同様に考えれば朝鮮語への翻訳不能の、もしくは理解のできない日本的な精神を作品に抽入するには、やはり日本語を用いざるを得なかったのではないだろうか。つまり、崔貞熙は日本的な精神に基づいた主人公の行動を描くにあたり、その本質についての問いを伏せ、日本語によってそのまま小説の中に移し入れたと解釈することができる。そうして崔貞熙は息子の死について想像することなく、ただ物語の枠組みとして利用することにより、自らの心情を織り込んだ「野菊抄」を戦争協力小説として成立させることができたと思われるのである。

## 6 おわりに

植民地末期における崔貞熙の時局関連作品には三つの類型が見られた。一つ目は「幻の兵士」のような文字どおりの「内鮮一体」を標榜した作品であり、二つ目は「二月十五日の夜」や「薔薇の家」のような「愛国班」の活動を賛美した作品である。そして三つ目が「黎明」や「野菊抄」のような「軍国少年」とその母が登場する作品である。このうち「野菊抄」は表面上は他の作品と同様の単純な戦



争協力小説であるが、その軸には崔貞熙が「地脈」以来、繰り返しテーマとしてきた母性についての強い関心が貫かれている。「野菊抄」はそれが自身の息子の「死」へ結びつく形で描かれていることが特徴的である。主人公と息子との「死」をめぐるのやりとりは、崔貞熙の他の文章にも共通して挿入されてきたものであるだけに注目する必要がある。本稿では当時の教育やメディアの実態、そして日本語小説であることと関連づけて解釈し、「野菊抄」が日本語であればこそ描き得た小説であることを明らかにした。このことについて今後、さらに多くの資料をもとに検討を深めていきたいと思う。

## 注 記

本研究は日本学術振興会より科学研究費補助を受けている基盤研究 (B) 「朝鮮近代文学における日本語創作に関する総合的研究」 (課題番号: 25284072、代表: 波田野節子) の一部である。

## 注

- 1 新潟県立大学国際地域学部
- 2 新たに発掘された崔貞熙の作品として、「5月9日」(『半島の光』1942.7)、「軍国の母たち」(『半島の光』1944.2-4)、「軍国母性讃」(『半島の光』1944.6-7)、「徴用列車」(『半島の光』1945.2)の4作品が『実践文学』73号(2004・春)に掲載されている。それらはいずれも朝鮮語で書かれており、日本語からの翻訳作品である可能性も含めて検討する必要がある。
- 3 翻訳ではそれ以前に「逝ってしまった美禮」(『中央』1934.2)が「日蔭」という日本語小説に改作され、『大阪毎日新聞朝鮮版』(1936.4.27-5/1)に掲載された(大村益夫・布袋敏博/編『近代朝鮮文学日本語作品集 1901～1938』創作篇4、緑蔭書房、2004所収)。
- 4 崔貞熙「ではご無事で」、『国民新報』第36号、1939.12.3(大村益夫・布袋敏博/編『近代朝鮮文学日本語作品集 1908～1945』セレクション6、緑蔭書房、2008、p.227)。
- 5 崔貞熙「幻の兵士」、『国民総力』1941.2、p.126(大村益夫・布袋敏博/編『近代朝鮮文学日本語作品集 1939～1945』創作篇3、2001、p.293)。
- 6 同上、p.129(同作品集、p.296)。
- 7 崔貞熙「内鮮問答・親愛なる内地の作家へ」、『モダン日本・朝鮮版』1940.8、p.174。
- 8 波田野節子「李光洙の日本語小説と同友会事件」、『朝鮮学報』第232輯、2014.7、p.56。
- 9 崔貞熙「二つのお話」、『京城日報』1941.1.5 夕刊(大村益夫・布袋敏博/編『近代朝鮮文学日本語作品集 1939～1945』評論・随筆篇3、緑蔭書房、2002、p.123)。
- 10 同上、p.124。
- 11 樋口雄一「太平洋戦争下の女性動員 ― 愛国班を中心に」、『朝鮮史研究会論文集』No.32、1994.10、p.119。
- 12 同上、p.121。
- 13 同上。
- 14 林鍾國『親日文学論』、民族問題研究所、ソウル、2003、pp.124-125。
- 15 「国民皆労座談会三」(『京城日報』1941.9.25)に金東煥の発言が掲載されている。
- 16 崔貞熙「初秋の手紙(第一信)債券を売る日」、『京城日報』1941.9.23 夕刊、3面。
- 17 崔貞熙「二月十五日の夜」、『新時代』1942.4、p.124(大村益夫・布袋敏博/編『近代朝鮮文学日本語作品集 1939～1945』創作篇4、緑蔭書房、2001、p.265)。
- 18 崔載瑞「私の頁」、『国民文学』1942.3、p.14。
- 19 崔貞熙「黎明」、『野談』1942.5、p.85。
- 20 同上、p.79。日本語訳は筆者による。以下、朝鮮語から日本語への翻訳は全て筆者による。なお、崔貞熙は1941年12月27日に府民館で「軍国の母」という講演を行っている(林鍾國、上掲書、p.133)。注34でも言及。
- 21 同上、p.82。

- 22 同上、pp.85-86。作品中には「ニッポンの海軍世界一」、「神に祈る武運長久」、「まごころ込める慰問袋」などのカルタの文句が書かれている。
- 23 崔貞熙「対米開戦と婦人の決意」、『毎日新報』1941.12.12、4面。
- 24 「帰還勇士と文人座談会」、『緑旗』1942.1、p.115(図書出版青雲版)。
- 25 宮田節子『朝鮮民衆と「皇民化」政策』、未来社、1997、pp.57-71 参照。
- 26 海田要「志願兵制度の現状と将来への展望」、緑旗連盟/編『今日の朝鮮問題講座』第三冊、1939.11(『日本植民地教育政策史料集成・朝鮮篇』第32巻、龍溪書舎、1989所収)。
- 27 平井武臣「海田大佐に訊く——志願兵訓練所を訪れて——」、『緑旗』1939.8、p.51(図書出版青雲版)。
- 28 『新しい朝鮮』(朝鮮総督府情報課編纂、1944)では1939年6月22日に「山西中條山脈の戦線」において戦死したと記し、その様子を美談として伝えている(朴燦鎬/編、覆刻版『新しい朝鮮』、風涛社、1982、pp.48,50)。
- 29 鈴坂史郎「その後の志願兵」、『緑旗』1941.11、p.165(図書出版青雲版)。
- 30 内海愛子「朝鮮——侵略戦争に動員された朝鮮人」、内海愛子・田辺寿夫/編著『アジアからみた「大東亜共栄圏」』増補版、梨の木舎、1998、p.44。
- 31 海田要「半島の女性へ贈る」、『三千里』1940.7、pp.46-47。
- 32 「帰還勇士と文人座談会」、上掲、pp.114-115。
- 33 崔貞熙「御國の子の母に」、『京城日報』1942.5.19、3面。
- 34 これは注20に示した崔貞熙の講演「軍国の母」の原稿と思われるが、『大東亜』に掲載された題目は「君国の母」となっている。
- 35 小野順子はこれらの作品に共通して見られる同様の言葉について、「崔貞熙の『親日』的な作品にあつての象徴的な表現」であるとしている(小野順子「崔貞熙の作品にあらわれた二つの戦時体験——太平洋戦争と朝鮮戦争を中心に——」、『福岡大学人文論叢』第42巻第3号、2010.12、pp.741-742)。
- 36 拙稿「崔貞熙の植民地末期小説研究」、『県立新潟女子短期大学研究紀要』NO.41、2004.3、p.210。
- 37 崔貞熙『『真実』で勝て』、『三千里』1940.12、pp.60-61。
- 38 崔貞熙「野菊抄」、『国民文学』1942.11、p.143。
- 39 三枝壽勝「一九四〇年代前半期の小説について」、『朝鮮学報』第86輯、1978.1、p.137。
- 40 李光洙「兵になれる」、『新太陽』1943.11(大村益夫・布袋敏博/編『近代朝鮮文学日本語作品集1939~1945』創作篇5、緑蔭書房、2001所収)。
- 41 波田野節子『李光洙』(中公新書、2015、p.148)によれば、李光洙の長男は1934年2月に敗血症のため6歳で死去している。
- 42 崔貞熙は1970年代になって過去の対日協力について問われたとき、「日本軍があんなに早く負けるとは思わなかった」と述べたとされる(チョン・キュウ「崔貞熙と二人の娘I」、『中央日報』2010.4.11)。
- 43 日本では太平洋戦争開戦後、戦争のヒーローとして「九軍神」を祭り上げる大キャンペーンが展開された(吉田裕『アジア・太平洋戦争』、岩波新書、2015、p.66。小熊英二『生きて帰ってきた男』、岩波新書、2015、pp.42-43)。「九軍神」は朝鮮総督府編纂の教科書『初等修身』(第4学年)においても「ハワイ海戦の九勇士」として教えられた(藤田昌士「朝鮮総督府編纂・初等学校用修身教科書の検討——天皇像と軍事教材を中心に——」、『民主教育研究所年報』10、2009、p.305)。
- 44 藤田昌士、前掲書、p.302。
- 45 朝鮮総督府『教科書編輯彙報 第八輯』、1941.3、p.93(『日本植民地教育政策史料集成・朝鮮篇』第23巻、龍溪書舎、1990所収)。
- 46 公立普通学校への就学率は1942年時点で男子56.3%、女子24.2%であった(佐野通夫『日本植民地教育の展開と朝鮮民衆の対応』、社会評論社、2006、p.143)。
- 47 毛允淑「女性も戦士だ」、『大東亜』1942.5、p.112。
- 48 金在湧は女性作家たちの時局対応について述べる中で、毛允淑は女性も男性と同等に前線に出ていくべきだと情熱的に訴えた代表的な例であるとしている(金在湧「女性性と国家主義の結合としての親日文学——日帝末期の崔貞熙の文学」、『実践文学』73号、2004春、p.229)。
- 49 一ノ瀬俊也『日本軍と日本兵』、講談社現代新書、2014、p.63。

- 50 新谷尚紀「慰霊と軍神」、藤井忠俊・新井勝紘/編『人類にとって戦いとは』3、東洋書林、2000、p.167 および、藤井忠俊『国防婦人会』、岩波新書、2015、p.166 参照。
- 51 宮田節子、前掲書、p.76。
- 52 金活蘭「女性の武装」、『大東亜』1942.5、pp.96-97。
- 53 1941年4月の「国民学校令」により、「国民学校規定」から朝鮮語の教授指針の規定が欠落した(武田幸男『朝鮮史』、山川出版社、2003、p.311)。